

を用いて柳の考える「自然」について検討しよう。

さほど長い文章ではない「雑器の美」の中に、「自然」という単語は全部で二十二回も出てくる。そのほか「天然」や「自から」といった「自然」と関連する単語もいくつか使われている。それらの意味を分類すると、だいたい三種類にまとめられる。はじめに、一般的な意味での自然で、自然が豊富であるとか自然現象という場合の自然である。つぎに、意識を介在させない行為や、なめらかな動きという意味での自然である。つまり、自然な振る舞いとか自然に動いたという場合などの意味である。三つ目は、特別な存在としての自然である。この三番目の自然は、明確に説明されてはいないが、文脈上、何か特別なものと理解するしかないものである。そして柳は、一番目と二番目の自然の根底に常にこの三番目の自然を忍ばせて発言している。

何か特別な存在としての自然、これを理解するために、柳が宗教哲学者として活躍していたときの論文「宗教的自由」(大正五年)を参照しよう。これは人間をめぐる自由論と決定論の相克に関する論文である。柳は言う。相対的次元においては決定論が正しいことは疑い得ない。だが、絶対域においては実在との一致により人間は絶対的自由すなわち宗教的自由を得ることができると。それでは実在とは何か。それは神のことである。

柳の言葉を直接引こう。「哲学又は宗教的見地を去って芸術的に此自由を解こうとするならば、実在若しくは神と云う代りに自然と云う言葉が最も之に適當するであろう。ここに自然と

はもとより現象に終る形体自然を指すのではない。万象の内裡に流れる自然そのものの心を云うのである。一切の自然性の泉を示すのである。」(原文正字正かな)

昭和を迎え民芸運動にますます奔走する柳は、一見すると宗教哲学を忘れてしまったかのように思われたが、昭和二十四年に宗教哲学と美思想の結合した作品『美の法門』を発表する。ある時柳は、『無量寿経』の法蔵菩薩の四十八の大願を読んで、美に関する積年の疑問が解ける体験をする。その体験を元に一気に書き上げられたのが『美の法門』であり、これは柳晩年の美思想を理解するために最も重要な論文である。その『美の法門』で柳は「自然」に対する考えをさらに一歩前に進めることになる。

中世禅宗寺院の伽藍空間における 宋代風水術の影響について

鈴木 一 馨

本論の大きな目的は日本風水史の解明にある。これについてはすでに「風水説の受容」(増尾伸一郎他編『環境と心性の文化史』上、勉強出版、二〇〇三)にてデッサンをしておいたが、その過程で特に日本風水史の上で転機と考えられたのが、中世の日宋交流に伴う宋代風水の受容である。

中国では九世紀末期から十世紀初期(唐末〜五代)にかけ

第12部会

て、地形の性格によって地気の流れや性質を判断し風水判断を行なおうとする江西派と、方位の性格によって地気の流れや性質を判断し風水判断を行なおうとする福建派という大きな二つの風水の流派が成立したと見做されており、中国風水史での転機となっていた。唐末から五代にかけて小康状態であった日中交流が再び盛んになるのは宋朝成立後の十一世紀以降のことであり、これは明州を中国側の窓口として行なわれたが、この頃から唐末以降に形成・発展した新たな風水思想・術のうち江西派のものが新知識として受容されたと考えることは、寢殿造庭園の成立を踏まえると想像に難くない。しかしながら、そこには同法の特徴である龍脈判断の受容を伺わせるものが見あたらない。

日本において本格的に禅宗が受容され始めたのは十二世紀以降であるが、横山秀哉『禅の建築』（一九六七）や『禅学大辞典』（一九七八）では『五山十刹図』（室町期か）や『建長寺伽藍指図』（原図一三三一）などに基き、その禅宗伽藍の中軸は一直線であり中心伽藍はその軸線上にあるとしている。しかしながら管見の限り、日本の禅宗寺院で真に一直線上に中心伽藍が配置され左右対称の構造となっているのは、十七世紀に創建された富山県高岡市の瑞龍寺の他はない。つまり「建長寺伽藍指図」に一直線の中軸を持つように描かれている建長寺においてすら、近年の発掘により一直線上に中心伽藍が配置されていなかったことが判明しつつあり、むしろ中心伽藍の乗る中軸は一直線ではないことの方が新規に創建された禅宗寺院においては通常の状態だったと考えられる。このことは、六世紀の仏教

の受容以来、十二世紀の院政期に創建されたものに至るまで、規模の小さい寺院や平安初期頃より盛んに建立され始めた山岳寺院などの例を除き、多数の堂宇を抱える大寺院がほぼ南北の正方位を貫く一直線の中軸を持ち東西対象の姿を見せていたのに対して、異質な空間構成をなしていたと言うべきである。

禅宗伽藍の中心軸が一直線にならないことの理由として考えられることが、龍脈説と寺院の選地の関係である。これについては何曉昕が『風水探源』（一九九〇）にて、天台山国清寺や明州阿育王寺などの寺誌においてそれらの寺院が龍脈の適地にあるといった龍脈説と関係しての立地説明をしていることを指摘しているが、龍脈の適地にあるということは同時に龍脈の上に乗っていることを踏まえるのならば、自然その中心伽藍は龍脈に沿っていることになる。中世日本の禅宗寺院が果たして龍脈判断を踏まえて立地されたのかどうかは、まだ十分な検討ができてはいないが、専門の最初の寺院である聖福寺が、入宋僧栄西によって中国系住民の多く居住していた博多に創建されたことからすれば、中国系技術者がその創建に関与していたことも十分に考えられる。少なくともその伽藍の中軸が一直線になっっていないことは、この龍脈説により構成された伽藍空間のあり方が、伽藍構成の様式として認識され禅宗の伝来と共に受容されたのだと見られるのである。

なお、本発表は平成十八―二十一年度科学研究費補助金基盤研究（C）「中世日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究」（課題番号一八五二〇〇六〇）による研究成果の一部である。